

こゝに隆寛と親鸞の重大なる共通点を見出すと同時に親鸞が隆寛を先輩として仰ぎ聖覚と同じように同行として敬慕したる事情が理解出来るのである。

往生拾因の研究

平井義孝

日本に於ける浄土教は、法然の一宗開立によつて大成されたのであるが、それまでの日本浄土教はどのようなものであつたのだろうか。それを知る手がかりとして、永観の「往生拾因」にみられる浄土教思想を考えてみたのである。

「往生拾因」の才一因に、称名の功德を強調している。即ち、

「弥陀名号中即彼如来從初發心乃至仏果、所有一切万行万徳皆悉具足無有欠減。非唯弥陀一仏功德、亦攝十方諸仏功德。一切如来不離阿字故。」

と述べ、弥陀の名号は阿字を離れないから万行万徳を具足すると説くのである。この阿字観をもつて弥陀の名号の功德を強調する事は、彼が未だ密教的な域を出ていないことを示すものであり、又彼の特色あるものである。才八因に於て、一心に称念すれば、三昧発得の故に必ず往生を得るとのべ、

「夫諸法本無自在、唯是一心所作。流転生死心染相、趣向菩提心淨相、但散心事難事、專念事易成、（中略）是一心之力也。染淨諸法皆以如是、往生淨土業豈不依一心哉。」

と言つている。諸法はもとより自性がなく、全て一心の作であつて、散心によつては一心とならないから、何事も成じがたく、專念は一心を得るから何事も成じやすいのである。三昧を発得して達成せられると説くものである。

又永観は才八因に、

「行者廃余一切諸願諸行、唯願唯行念仏一行。散場之者千不一生、專修之人万無一失。」

と述べている。行者は諸願諸行をすてゝ、念仏一行を修すべき事を勧め、専修の人なれば必ず専念に至り往生出来る事を明している。こゝに彼が、念仏の一行をとり、余行を廢して、専修念仏の意をみせている事に注意しなければならぬ。専修念仏思想は、法然に於てみられるように、永観の専修念仏もそれに近いものと言えるのである。しかし、念仏一行をとり余行を廢した理由は、専念をおこすためのもので、それには次のような説をもつて解釈しているのである。即ち、

「凡夫行者唯從初心有得定者、從散位入定位、是三乘行人入聖方便也。施彼黑鳥爲得白鷄、唱此散稱爲發專念。而今不肯散稱、蓋是無志之甚也。」

と述べている。だれでも始めから得定の者はなく、まず散位に入つて定位に至るのが常道であるから、散位の称名を唱えるのは、三昧を發得して専念に至るためであつて、それは定位のものでなければならぬと説くものに外ならない。定位の専念を修す事によつて始めて往生を得るというのである。又永観は才八因の中に、

「何此人欲生我國、口唱我名心猶散乱、若非一心違我本願。可耻可耻、早速制伏一心不乱。」

と述べているように、永観の意とする所は、一心にあらざれば仏の本願に違うから、心を専らにして、一心とならなければならぬ。一心でなければ、散位の念仏を称えても定位のそれに至ることは不可能であり、一心は往生極樂を願う者にとつて、欠くべからざる存在として強調されているのである。

これに對して、法然の説は、散位の称名を専念する事にあつて、永観のように定位を求めたものではなく、散位で往生を得ると説かれたもので、この点に於ても、永観と法然の間には思想的な相違を認められるのである。

永観は名号の称念を勧めるよりも、称名によつて三昧を發得し、定位に入つて往生する事を勧めるのが中心であり、その事を彼は、

十因之興意在斯因、不愛身命但惜三昧。
と述べているのがそれである。

永観は念仏の態度について大集經日藏分の文をひいて

述べている事は、大声による称念は三昧が成じ易いとし、小声による称念は馳散が多く三昧に至る事は不可能であると説くものである。そして永観が実践し、彼が体験した実績をもつて証明しているのである。

このような永観が、善導に対する見方や、善導を三昧発得者としてもつた関心は、法然が善導に対してもつたそれとおのずから違つて来るのも当然の事と思われるのである。

彼の浄土教の中、往生拾因の才十因に、説くことも見逃してはならないのであつて、即ち、称名念仏が、才十八願に順ずる行である事を示し、その本願随順の行を、善導の「観経疎」より引いて

「行有二種、一一心専念弥陀名号、是名正定業、順彼仏本願故。若依礼誦等即名助業。除此二行自余諸善悉名雜行。」

と述べている。往生の行に正雜助正の別があり、称名行が仏の本願に随順するから正定業と言ひ、他の正行を助業と言ひ、その他の諸善を雜行と名づける事を強調して

いる。この永観の説くところは、善導の「観経疎」散善義に説かれるもので、この文を引用した事に最も意義があり、注意しなければならないのである。

永観が善導の「観経疎」に説かれる就行立信釈に新しく注目した事は、その前の源信に於ては全く認める事が出来ず、法然に至つては、「選択本願念仏集」の二行章にみられるものであつて、この点に於て、永観と法然の關係に重視すべきであらう。しかし彼は、散心の称名をもつて正定業と規定したのではなく、定心の称名をもつて正定業と規定した事は明らかであり、法然が散心の称名を正定業としたのと大きな相違点をみつける事が出来るのである。こゝに彼が念仏宗と号しながらも、未だ聖道門的立場を脱しきれなかつた事がうかがわれるのである。